

〈近代本論第十六回：条約改正交渉の失敗と国家モデルの探索〉

参考文献

※久米邦武編『米欧回覧実記』全五冊、岩波文庫（初版刊行は1878年）

※福沢諭吉『西洋事情』（1866年初版）岩波版選集第一巻所収

※『木戸孝允日記』全三冊、国立国会図書館デジタルライブラリー

日本の近代国家草創には明確なプランニングがあった。それは明治四年十一月から明治六年九月までの一年九ヶ月におよぶ、〈米欧回覧〉による大規模な近代制度、近代産業、近代貿易の観察と解析である。その結果、そこで身につけた合理的現実感覚が、帰国直後の西郷たちとの征韓論との対峙によってまず発揮されたことはよく知られている。

しかしこのプランニングには、裏の歴史があった。それは不平等条約の是正がこの使節団の当初の大目的であり、近代制度と列強の実際の視察は、あくまで副次的な目標だったらしいのである。副次的だがもちろん大きな意味を使節団も認めていた。それは〈近代化のモデルの探索〉と標語化できる。つまりもっとも日本にとって意味のある参照対象はどの国なのか、それを求めていたのである。この欲求は直接的であり、またかなり性急なものであった。

それが条約交渉の失敗によって、視察の意義の核心部が変容する。つまりある種の脱力感が視察団を襲い（これは木戸孝允の日記に明確に反映している）、そしてその脱力感が、面白い形で、観察の全体性、そして客観性と構造的性を確保するきっかけとなった。いわば怪我の功名とでも言うべき転回で、大目標が失われた、そのことによってふっと力が抜け、彼ら本来の旺盛な好奇心と政論で鍛え上げたイデオロギー解析の能力が、次第に全面に登場してくるのである。この観察の全過程が、日本の近代国家の創建には決定的な意味を持った。いわば新制度の建築家たちのメンタルとエートスを鍛え上げたのである。その全過程をこれから見ていこうと思うのだが、まずその前半部、条約交渉の失敗の詳細を見ておこう。それが結局、近代国家の青写真の構造化を規定する、否定的かつ主体的要因となっているからである。

まず米欧回覧の前提となる、木戸たちにとっての欧米視察の（明治初年度における）意義を概観しておきたいのだが、その前にその力の抜けた客観的観察という点を見ておこう。これが『回覧』の基調であり、それは真の意味での近代的な客観性を備えているからである。

このモデルはすでに存在した。福沢諭吉の『西洋事情』をはじめとする欧米の啓蒙的紹介であり、そこではたとえば、開国の最大のきっかけとなった〈蒸気船〉が次のように紹介されている。

〈蒸気船 蒸気船は^{アメリカ}亜米利加合衆国の発明なり。千七百八十年の頃より工夫を始めたれども、^{しばしば}屢失錯して功を成さず。千八百七年、ニューヨークのフルートンなる者、百二十馬力の蒸気船を^{つくり}造て^{はじめ}初て大成し之を試みしに、三十二時の間に百二十里を走れり。之を蒸気船の初とす。〉（福沢諭吉『西洋事情』選集1-130p）

これはすぐわかるように、服部之総が調べたあのクレルモント号（クラールモント号）の紹介である。それがごく普通の百科事典的な事実紹介であることで、われわれの注意をほとんどひかないくらいに〈スタンダード〉なものだが、それがまさにこの時代、福沢によって紹介完成されつつあった事実伝達の様式であることにあらためて注意しなければならない。つまりそれは蘭学—洋学の文脈においてすら、おそろしく〈モダン〉であったということである。これは近代化のもっとも基底部にある、事実性の尊重、そしてそれを合理的に判断するという、定位の心性と不可分の関係にある。そのアングルからして、たとえば蒸気船と近代化の関係も正しく洞察されるのである。

〈これより^{その}其用法、^{ようや}漸く世に弘まり、初は川船及び内海の渡船に用ひ、次第に之を改正して、遂に軍艦、商船、飛脚船（※郵便専用船のこと）と為し、万里の大洋を往来して、暴風激浪の難を凌ぎ、攻防の勢力を強くし、貿易の便利を増し、航海者の勇氣、昔時に百倍せり。〉（同上）

これでペリー来航の背景は、近代的技術革新の一端として、正しく理解されることになる。つまり事実性の確認は、出来事のオーラのようなもの、初期的なショックにつきまとう器物の物神性、そしてそれと融合したイデオロギーの神話性を脱色してくれるのである。これはまさに、十八世紀の啓蒙哲学者たちが先鞭をつけた、合理的定位の基本型に他ならなかった。それをこの時代の日本に移入し、定着した第一人者が他ならぬ諭吉である。

こうした事実性の把握と概観は、すでにわたしたちの血肉と化しているもので、あらためてその祖型を確認しても、ほとんど自明の〈事実〉の印象しか受けないのだが、それが当時であって、まさに先駆的、前衛的であり、かつ（これが非常に重要なのだが）〈普遍的に〉近代的であったことは、たとえばあの〈たった四杯で夜も眠れず〉という幕末狂歌の文体およびそこに反映された定位心性と比較してみると際立つ。後者においては、事実性の確認も、また黒船が現れるまでの現象を概観しようとする意図もない。あるのは後に石川淳が〈文化文政期の屈折〉と名づけた（『文学大概』）、身分制における異化とアイロニーのアングルがあるのみである。

たとえばこの近代的定位の基本系の獲得によって、物理的構造と社会的構造の弁別も進む。福沢が用意に理解したのは、こうした蒸気船のような物理的構造体であり、それは数理的原理の把握によって、実見の前にすでに了解されていた。しかし社会的事実とは異なる。

それは社会生活の基本でありながら、幕末近代の日常生活と、西洋近代の社会制度との間には莫大な懸隔があった。この懸隔を最初に自覚し、〈事情紹介〉のテーマとしたのも、諭吉だった。たとえば、郵便制度をはじめて見た時の驚きをこう記している。

〈彼の郵便事業の取調べに苦しむたるは、今に記憶に存して忘れず。仏京巴里在留中に、何れへか手紙を出さんとして、其手続を偶然来客の一人に尋ねしに、客は紙入より四角なる印紙（※切手のこと）を出し、此印紙を手紙に張て出せば直に先方へ達す可しと云ふ。夫れは飛脚屋へ頼むことかと問へば、否などよ、巴里にそんな飛脚屋はなし、町内何れの処にも箱のやうなものあるゆゑ、唯その箱の中に投ずれば、手紙は自然に表書の届先に届くと云ふ。いよいよ不思議に堪へず。〉（福沢諭吉『福沢全集緒言』〈西洋事情〉、選集12—156p）

江戸的日常での書簡は飛脚頼みだった。パリにはもちろん近代的郵政制度の日常がある最先端の機械を見てもまったく驚かなかった諭吉も、これはほとんど魔法のように見えてしまう。その日の説明では理解出来ず、理解できないことには余計好奇心を刺激される彼のこととて、翌日わざわざ自分から客をまた訪ねて重ねての説明を乞い、三四日も往来を重ねてようやく「腹に落ちた」のだった（同上）。

より根幹の社会制度にかかわる「常識」の問題として、たとえば「政党」の理解の難しさがある。それは「人の集まり」をそもそも幕藩体制が敵視していたからだった。

〈例へば、政治上に、日本にては三人以上何か内々申合せ致す者と徒党と称し、徒党は曲事（※悪事）たる可しと政府の高札（法度の掲示場）に明記して最も重き禁制なるに、英国には政党なるものありて、晴天白日、政権の授受を争ふと云ふ。左れば、英国にては、処士横議（※乱暴な議論）を許して、直に時の政法を誹謗するも罪せらるることなきか、斯る乱暴にて一国の治安を維持するとは不思議千万、何の事やら少しも分らずとて、夫れより種々様々に不審を起し、一問一答、漸くして同国議院の由来、帝室と議院との関係、輿論の勢力、内閣更迭の習慣等、次第に之を聞くに従って、始めて其事実を得たるが如く、尚ほ未だ得ざるが如し。〉（同上、12—156p）

後に福沢自身、明治十四年の政変により藩閥政府から危険人物扱いをされ、やがて〈保安条例〉によって、政府の密偵監視の対象となる。つまりこの「徒党」の首魁あつかいをされたわけだが、藩閥政府の手先である強権主義者の頭の中身がまだ幕藩的であることが事柄の核心部にあった。そのこともまた彼にはすでに自明の事実として確認できたのではないかと思う。

しかし〈政党〉の近代性と、〈徒党〉の前近代性の範疇的な差異、しかしそれにもかかわらず、明治の相当に遅い時期まで、この二つがしばしば重合して観念されていたという事実はやはり日本の近代国家の核心部における前近代性の残存現象として、非常に重要ではないかと思う。つまり立憲や憲政そのものに対する〈圧〉の出力源の一つがどうやらここにあったのではないかと推定できるからである。つまりそれもまた、〈アンシャン・レ

ジーム〉における、〈等族〉的社会構造の有無という本質問題と連関していることが確認できるからである。ルイ王朝においては、すでに〈等族〉的集団は、頻りに集会を行い、そしてその集会は公認されており、けっして〈徒党〉ではなかった。しかし幕藩体制において、そして総じて儒教的支配体制においては、民衆は被統治者として、つねにアトム化され、分断され、集合すること自体が、ほとんど〈一揆〉の目で見られるという基本的事実がある（すでに確認したように中世期において普遍化していった一揆集団には、プロト等族的な社会性が見られた）。この事実があるからこそまた、自由民権運動の後期から立憲初期における強権官僚による弾圧の酷薄さも生まれてくるのである（代表としての三島通庸、品川弥二郎）。

それはまた後に詳しく見ることとして（第七章で予定している）、再び福沢が導入した近代的事実性、合理性のアンクルにもどることとしよう。それが〈米欧回覧〉の、特に後半部における観察眼の前提となっているという連関を検証しようとしていたのだった。

たとえば、福沢が可能にしたのは、都市環境、それも近代都市の全体的な把握である。二度目の洋行で（1862年）、すでにこの視座は獲得されていた。パリの一流ホテルはこのように描かれている。

〈昨晚^{パリス}に^{ちやく}着。旅館ホテル・デ・ロウヴルに止宿す。館は王宮の門外に在り。巴里府最大の旅館と云。六層楼^{わかち}を分て六百室となし、旅客止宿する者、常に千人より下ラズ。婢僕五百余人、其他衣肆、浣衣婦、匠工等、此館に属せる者ありて、日用の事物は悉く館内にて便ずべし。館内の各処に婢僕^{こゝ}の居室あり。爰より各室に^{テレグラフ}伝信機を通じ、各室内より婢僕を呼ばんと欲する時は、伝信機の線端^{あいす}を引きて号をなすべし。〉（福沢諭吉『西航記』選集1-25p）

各室からボーイを呼ぶシステムは、まだ旧式のベル式だが、それを〈伝信機〉式だとしたのは、福沢一流の〈翻案〉の工夫だと思う。両方とも日本には新しいシステムだからである。それはともかくとして、この紹介の眼目はそれが平易な〈システム〉の概観であることにあり、それは上で見た蒸気船の簡潔な歴史的概観と対になっている。こちらは空間的なシステムの概観だが、両者ともに近代的な座標システム（すでに見たようにデカルトの関数パラダイムを嚆矢とする）に則っており、それは例えば江戸期の草紙のトポスであった旅物語、そこに出てくる旅館の描写とはまったく質を異にしている。

さて、ここまでの福沢が用意した近代的観察の定型である。それが〈米欧回覧〉では縦横に活用されることになる。それには事实的背景があり、福沢の初期の啓蒙書、特に『西洋事情』の類いは、真のベストセラーとして当時の有識者たちのマニュアル本と化していたからだった。『西洋事情』の場合、版元からの印刷部数だけで十五万部以上、それに海賊版を併せると、二十五万部は下らなかった（『福沢全集緒言』に拠る）。これは当時の出版事情を考えると、未曾有のメガ・ヒットである。福沢はその原因をややアイロニカルに維新の志士たちの、〈無学〉に求めている。つまり漢学、儒教的な文脈における無学であり、それは必ずしも否定的な意味あいばかりではない。

〈此無学の一流が（※すなわち志士たちが）維新の大事業を成して、^{きて}扱善後の一段に乗り、鎖国攘夷の愚は既に之を看破して開国と決断したれども、国を開いて文明に入らんとするには、何か拠る所のものなきを得ず。流石の有志輩も当惑の折柄、目に触れたるものは近著の西洋事情にして、一見是れは面白し、是れこそ文明の計画に好材料なれと、一人これは語れば万人これに応じ、朝に野に、苟も西洋の文明を談じて開国の必要を説く者は、一部の西洋事情を座右に置かざるはなし。〉（『福沢全集緒言』〈西洋事情〉、選集12-158p）

〈米欧回覧〉に参加した使節団のコア集団は、開化と文明に強い関心を持つ青年官僚たちで、たとえば綿密な記録をほぼ独力で集成した編者の久米邦武（一八三九～一九三一）もその一人だった。彼が記録した文明化のスポットの記述はすべてシステム記述で、福沢の近代的精神をすでに肉体化していることがわかる。たとえば、当時、文明のシンボルの一つであった〈水晶宮〉の記録もその定型に則っている。

〈明治五年（一八七二年）八月十七日 晴 午後三時ヨリ「パークス」氏（維新時の英国公使ハリー・パークス）、「アレクサンドル」氏ノ誘ヒニテ、蒸気車ニテ「サイゼンハム」ニ至リ、水晶宮ヲ回覧ス。水晶宮ハ原名ヲ「キリスタル、パレイス」ト云。総玻璃ヲ以テ築キ成ス。是ハ一千八百五十一年ニ、倫敦ノ「バイトパーク」（※ハイドパークの誤り）ニ於テ、万国博覧会ヲ設ケシトキニ、彼地ニ建築シテ、出品ヲ陳列スルノ場トセルヲ、会畢リテ後ニ、此ニ引移シ、美観ヲ存セルモノナリ。全院悉ク鉄ヲ骨トシテ、満面玻璃ヲ以テ覆フ。風氣ヲ遮リテ、日光ヲ遮ラス。其長サ一千六百八尺（即百六十八間ナリ）ナリ。……〉（久米邦武編『米欧回覧実記』第二十五卷、〈倫敦府ノ記下〉、2-109f）

こうした名所旧跡の案内記は、ヨーロッパではルネサンス、特にイタリア・ルネサンスの名所スポットが教養旅行の対象となって生じたジャンルだった（大体十七世紀後半以降）。場所の正確な表示、陳列物の状態は再びデカルト的座標の援用により客観化される。われわれはここでもすでに近代的アングルを肉体化してしまっているので、そうしてガイドブックの淵源が、すでに近代的精神の発露であったことを丸忘れしがちだが、しかし実際にこうしたガイドの客観性そのものが江戸期にあるか、中世ヨーロッパにあるかと言われれば、ほぼ完全に欠如していることに気づかされる。教養的スポット自体、すでに述べたようにルネサンスの教養共同体（秘教的色合いを帯びた）の成立と不可分の関係にあった。そしてそれが大衆化されていくのがちょうどこの時代である（ヤーコプ・ブルクハルトのイタリア案内記『チチェローネ』1855年のヨーロッパ的ヒットがその画期となる）。したがってここでも久米たちの名所案内は、その近代的文体の文脈にきれいに乗り始めていることが確認できるのである。

しかし久米たちの場合には、この客観性はさらに深いところに達し始める。文明化の全体を問題にする意識が育ち始めると、その視線は文明の暗部にも届いていくのである。たとえばロンドンの裏社会が総体的に活写される。

〈少シク人行少キ街ニ至レハ、^{とうじ}偷児徘徊シ、前ヨリ帽ヲ圧シ、背ヨリ懷ヲ探リテ逃^{のが}レサル。殷劇ノ（※盛り場の）市ニハ、拐^{イタツラモノ}児（※遊び人が）群ヲナシ、数歩ノ間ニ、金鎖玉鈎（※宝石の装飾品）^{うゆう}鳥有トナル（※スリに盗まれて消えてしまう）。少シク^{りようらく}寥落ノ郷ニハ（※さびれたあたりでは）、短銃ヲ携へ、毒薬ヲ懷ニシテ、行旅ヲ悩スノ賊アリ、鉄道汽車ノ上ニハ、博徒拐^{カタリ}児、各車ヲ回りテ田舎漢ヲ^{イナカモノ}論誣ス（※うまくだます）。之ヲ聞ク（※以下のことを聞いたことがある）、倫敦ノ内ニ、入水ノ河アリ（※投身自殺の名所がある）。窮困ノ男女、此ニ投身スルモノ、常ニ絶ヘス。悪党ノ房アリ（※たむろしている巢窟がある）。百種ノ無頼ミナ集リ、賭博ヲ張リ、鴉片ヲ吸ヒ、悪状ミナ備ルト。〉（同上、第二十一卷〈英吉利国総説〉、2－40 p）

これは興味本位の描写ではない。文明の裏面を描くだけでなく、久米はただちにその構造分析を開始する。まず貧富の差があり、起業家の倒産の頻度があり、土地所有者の減少と富の寡占の傾向が定方向的に強度を増していく現実がある。

〈富ムモノハ日ニ富ミ、貧ナルモノハ終身^{きつまつ}屹屹トシテ（※困窮して）、僅ニ自ラ食スルノミ。国中ノ民貧富ノ均シカラサル如此シ。故ニ^{かくのごと}険ヲ越へ遠キヲ渡リテ他方ニ営ム（※異郷で生活をたてようとする）。英人ノ米ニ移ルモノ、年々十二万人ニ及ヒ、其他加^カ掌^{ナダ}陀、「オオストラリヤ」ニ移ルモノヲ并セ計フレハ、殆ト三十万口ニ及フトナリ。米^カ国ノ植^ナ民ハ、英国ト独逸トノ移住民ヲ仰ク。移住民ノ多キハ、其国生計ノ難^{しんじ}キ徴ナリ。〉（同上、2－40 p）

文明の暗部は、貧富の格差を産み、それが結局移民の動機となる。そして移民国アメリカはますます強大になっていくというこの観察は、ほとんど第一線の社会学者のそれであり、まことに見事だと言わざるをえない。『米欧回覧』では特にこのイギリスの総論からこうしたシステムの分析が時折試みられるようになり、それはそのまま木戸、岩倉そして大久保たちの文明への関心が一般化し、全体化していったことを反映しているのではないかと思う。そしてその前提は、上で述べたように条約改正交渉がかなりみじめな形で頓挫したことだった。

それはそれとして大失敗だったのだが、しかし明治国家の草創にとっては、こうした全体的視野は不可欠であり、それが失敗を糧として深まったことは、長期的に考えれば大きな収穫と言えるのではないかと思う（ここにも歴史の弁証法のようなものが介在している）。この改正がもしうまくいったとしたら、視察そのものはすでに予定済みであったし、使節団ははるかに気持ちよく文明概観を続けたことはたしかだが、その気持ちのいい分だけ、普通の視察の次元、悪くすると物見遊山気分のもれも混入したかもしれないわけで、その時には上で見たような裏社会の構造分析も不可能になっていたかもしれない。したがってやはり、「災いが転じて福になった」という側面は否めないと思う。しかしまた、失敗の形は、視線の方向を決定する、そういう失敗でもあり、またそれはある意味で、ペリーやハリスが含意していたあの「ダブル・スタンダード」と不可分の関係を持っていた。

したがって、視察の（思想的な）成功を通観する前に、この失敗の質を確認しておくことにしよう。

まず視察団の必要性は、すでに明治当初から感じられていた。これもすでに見たが、幕府が外交政策を展開しようとして、その水準に達せず、まったく現地で「お客さん」扱いされて失敗を重ねていたという前史がある。この轍を踏まずに、実質の伴った視察を早急に行う必要があった。そういう時に、あの大隈や副島の師であった宣教師（で英語教師）のグイド・フルベッキ（1830～1898）が、「近代制度全般の視察を行うべきである」という献策を行った。進言を行ったのはすでに新政府に登用され、木戸の右腕となりつつあった大隈に対してである（1868年六月）。

この〈ブリーフ・スケッチ〉を大隈自身が翻訳して政府要人に回覧した。それがしかし計画の始まりだったというよりは、すでに新政府のコンセンサスとして幕府型外交の失敗を繰り返さないために、現地の視察とそれを踏まえての交渉が不可欠であるという考えが共有されていたことは確実である。明治二年の正月には、その使節団が具体的に評議され始めたらしく、大久保利通の日記には次の記載が見られる。

〈明治二年一月十七日 外国に公卿四五名、諸藩の士精撰を以て遊学仰せ付けられ候儀、今日急務の一条。〉（『大久保利通日記』下12p）

「公卿四五名」とあることから、これはすでに政府上層部の集団での視察を考えていることがわかる。したがってフルベッキ、大隈が期待していたかもしれない、大隈とフルベッキの人脈で政府視察を仕切ろうという期待は、わりと早く脇に置かれていたことも分かるのである。

明治初年度の政府の中心的課題は、藩制度、士族制度のソフトランディングが一つ、これは旧体制の精算である。それと新しい国家体制の根幹をできるだけ早急に造ることだった。版籍奉還は前者の狙い、そしてそれと抱き合わせになった廃藩置県は後者の最初の成果であるから、新旧の課題は多くの場合表裏一体となっていた。そしてその立案の中心にいたのは、まだ大久保ではなく、木戸である（岩倉は調整役を担っていた）。この政権中枢の布置からして、〈米欧回覧〉のプロジェクトも、実質木戸が中心になって組織化が進むことになる。それは木戸日記を一読するとすぐに浮かび上がる基本的事実なのだが、重要なことは、視察の具体化が進む前に、まず条約改正という大目標が設定されていることである。

〈明治四年八月二十日 右院にて条約改正の御評議あり。〉（『木戸孝允日記』上90p）

ここで条約改正の大筋は決まったのだろう。すぐに木戸はまず〈洋行〉の下案を岩倉と詰め（明治四年九月十三日条）、岩倉、大久保、伊藤と〈順序〉（視察の日程）を決定し（明治四年九月二十五日条）、メンバーを決める（明治四年十月十九日条）。

このあわただしい計画立案と決定には、もう一つ隠れた背景があった。これも木戸日記から浮かび上がるのだが、この時期木戸は朝廷の〈専横〉に苦勞していた。具体的な人名

は挙げないのだが、〈朝廷不良之徒〉という言葉が何度も登場する。そして大久保や特に岩倉と何度もそのことで面談を重ねている。これはあきらかに神祇官制の専横の余波、その収束を巡ってであり、具体的にはあの廃仏毀釈の破局、その事後処理に追われていたことが推定できる。したがって、こうした問題がなければ、おそらく日程は〈条約改正期日〉にあわせて組まれていたのではないかと思う。

つまり通商条約には、一定の年限がたてば、その条項に問題を感じた側が改正を提議できることになっていたからである（日米通商条約の場合は、維新前にすでにその期間に入っていた）。それをぎりぎりまで延ばさざるをえなかったのは、やはり朝廷内部のゴタゴタ、つまり後に国体論派を形成していく祭政一致勢力の専横とその事後処理に木戸たちが追われていたことが原因であると思う。これもまたしかし〈米欧回覧〉の方向付けとしては、重要な事実かもしれない。つまり反・近代的な祭政一致派の朝廷勢力をひとまず追放精算し、はっきりとした近代国家草創をめざそうというコンセンサスが確認されたところで、この大視察の日程が組まれたことがわかるからである。そこには（すくなくとも使節団の核心部において）反動的、攘夷的イデオロギーが混入する心配はまったくなかったとも言える（実際に『回覧』の基調は、明るく、近代的で、合理的である）。

日程とメンバーが決まると、再び条約改正の詰めにかかっている。

〈明治四年十月二十日 雨 九字（※時の宛字）過外務に至る。改訂する所の条約を調へり。〉（『木戸孝允日記』上111p）

交渉はワシントンで始まった。ホワイトハウスの参観の合間に、外務省に出かけて、「国書（条約国書）の文意の盡きざるところ」があることを伝えたのである。これが条約に名言された改正に向けての意思表示になるはずだった。

しかしちょうどここいから、使節団の混乱が始まる。木戸たちは当初、どうやら各国歴訪の折りに、まずこの「文意の盡きざるところ」、つまり条約本文の施行についてのグレーゾーンの詰めという形から交渉を始め、それから徐々に日本側にとって最大の問題である関税自主権と治外法権の撤廃への流れをつくるつもりだったようで、それは失敗後の木戸の文言から透けて見える事実である。この手順はまさに「外交的」で、成功したかどうかは別として、ともかくまず意思表示し、相手に準備させ、その相手の案を公使たちが持ってくれば、東京でそれを一緒に検討するという形は、当時としてはベストの手順だったと思える。それが現地外交官の提案で大きくゆらいだ。

まずイギリス、アメリカへの留学を経て、当時〈小弁務官〉という現地スタッフに着任していた森有礼（一八四七～一八八九）が、それは迂遠だ、現地で交渉すれば早く望む結果が得られると持論を主張する。これに伊藤が賛成した。伊藤と森は使節団の通訳格で、最も英語ができる二人であり、また現地人の受けも非常によかった。木戸や岩倉ははじめての洋行であり、国勢や近代制度を日々学習中の段階である。どうやら、彼ら元勳級の最上層部の〈旧弊さ〉のようなものを、現地スタッフ（特に森）は感じたらしく、上下関係を越えた、よく言えば主体的、悪く言えば組織破壊的な言動が目立つようになる。その最大のものが、この現地交渉論だった。

木戸は半信半疑だったが、おそらくずっと右腕として活躍してきた伊藤もその意見になびいているのを見て、ひとまずその線で行くことにした。伊藤と副使の大久保の二人が急遽帰国して、現地での改正が可能になるような〈勅許〉を求めることにする。留守政府はそれを聞いて、やはり大きな危惧をいだいたが、しかし限定付きではあれ、ともかく現地交渉権は認めたと見られる。しかし大久保と伊藤が数ヶ月遅れで使節団に合流した時には、すでに大勢は決していた。日本側の直截な欲求、つまり関税権と治外法権をめぐる欲求は、まったく相手にもされなかったのである。それどころか、すでに条約に名言してある、〈疑義申し立ての権利〉を日本はひとまず使い果たしたことになり、次の交渉の目途すらたたないという、まったくもってみじめな敗北だった。交渉の当初に、すでにこの帰趨は明らかになってしまった。木戸はこう日記に記している。

〈明治五年二月十八日（※木戸たちはワシントン滞在中） 雨 終日内居。条約一条を集義せり。此度^{にわか}俄に大久保伊藤帰朝して条約改正の勅許を乞わんとす。今此挙動を反顧いたし候に、余等伊藤或は森弁務使等の粗^{ほぼ}外国事情に通せしに託し^{こつそつ}忽卒（※かるはずみに）其言に随ひ、天皇陛下の勅旨を再三熟慮謹案せざるを悔ゆ。実に余等の一罪なり。此度の条約、漫^{みだり}に森伊藤の唱ふところは、外国において結ぶに益ありと云。而して其実は其益^{はなはだ}甚^{はなはだ}少なし。〉（『木戸孝允日記』上148p f）

木戸は、こちらはすでに与えられる限りのものを諸外国に与えており、こちらにとって最大の問題である関税自主権の回復と、治外法権の撤廃は、貿易は「日本の開化の重要な一助である」という美辞麗句のみで受け流されてしまうと、交渉の悲しい現実を慚愧と憤懣やるかたない思いで述べている（同上）。これにはまた、個別交渉か、諸外国一括交渉かという手順も関係していた。日本側は一括を望んだが、アメリカ政府はそのための使節を欧州に派遣することすら拒否した。したがって交渉の場さえ確保できないままに、計画はすべてついていたのである。伊藤と大久保は六月に戻ってきたが、交渉の打ち切りを決定するしかなかった（同上、明治五年六月十七日条）。

森有礼は、明六社を組織し、近代的学制を整えるのに大きな功績があった人物だが、この時期の彼は平たく言って、現地同化が進みすぎ、「舞い上がって」いたことはたしかである。すくなくとも、木戸たち維新の中核人物に対する敬意が著しく欠如していたことは、事実であると言わざるをえない。たとえば木戸は森を「洋化日本蔑視論者」の一つのタイプとしてとらえているが、それはこの時点に限って言うと、おそらく正しかったのだろう。

〈明治五年三月八日 後刻、森弁務亦来る。過日来同氏の挙動意を得ざるものあり。米人^{かえつ}却て能く我国の情を解し、我国の風俗を知る。然るに当時（※現在）留学の生徒等も我国の本来の所以を深了せず。容易に米人の風俗を軽慕しいまだ己の自立する所以を知らず。漫^{みだり}に自主とか、共和とかを唱へ軽躁浮薄、聞くに堪えざるものあり。すでに森等の如き、我国の公使にして公然外国人中にて猥^{みだ}りに我国の風俗をいやしめる風説あり。〉（『木戸孝允日記』上157p）

森は一夫一婦論者であり、かなりエキセントリックな契約結婚の実践者であった。また当時はキリスト教に傾斜していたことも知られているから、その方面での〈我国の風俗〉を批判していたことは想像に難くない。これはしかし外交官としては、イロハのイに属する、「ためにならない客気」ではなかったかと思う。相手方に日本への軽侮の感を広めるだけで、何の益もないからである。木戸は部下をかわいがり、部下の使い方がとてもうまい穏やかな人物で、日記にこれほど否定的なコメントを記録することはほとんどない。したがってこれを人物の相性の悪さ、あるいは世代間の齟齬ととらえるのは、かえって表層的ではないかと思う。この森が代表する、「自主独立を気取る洋化紳士」は、文学化するとたとえばパリ帰りの永井荷風に化け変わるわけだが、その荷風もまた、主体的近代論者、石川啄木の猛反発をかったのだった。それは一言で言って、欧化近代論の根本にある主体性の喪失、「亜流への転落」の問題であり、この大きな問題を木戸も正確に予見していたように感じる。

しかしさすがに維新の志士の代表格、木戸孝允は行動力の権化である。この欧化才子たちの「英語ぺらぺら」に心底腹がたつたのだろう。ただちに現地で英会話を学び始め、あるていどの会話能力は身に付けたらしい。そればかりでなく、彼らが心酔するその共和制の根本を検討しようとして、アメリカの憲法を翻訳させ、それを熟読している（明治五年三月十七日条）。こうした予定外の行動により、彼もまた全体的視野を確保していくことになる。たとえば開化の欧化主義者とならんで、欧米には欧米で、日本の特に意匠文化の心酔者が多いことにも気がついた。彼らは日本の伝統を学び、模倣している。欧化紳士は欧米を模倣し、伝統を捨て去る。この交叉が「外国交際」から派生する一つの現実だった。

〈陶器を製造するを見る。本邦のものを摸せしもの^{はなはだ}甚多し。本邦の品近来従前の形ちを変して製造す。しかるに従前の形ち尤も称ふべきもの多し（※開化以前のものがよい）。今日の様子、^{ようよう}漸漸其美を捨るを嘆すと語れり。近来当世流の邪鄙なるものを製し、又は西洋等に摸するもの^{かえつ}却て我自然の風のよろしきものを廃棄せり。〉（同上、中270p）

こうして深化した彼我の文明状況に対する感覚は、もう一つの、より大きな目標に対して積極的な意義を有することになる。それは〈モデル〉の探索に関してである。つまり日本の近代化のモデルを、列強のどのあたりに設定するかということであり、これは後に立憲のモデル設定に連続していく重要なテーマとなる。

たとえば、イギリスも島国であり、同じ規模の人口を有する列強として、モデルとなりうるように感じられる側面があった。

〈此聯邦王国ノ総幅員（※総面積）ハ、十二万三千三百六十二方英里^{マイル}ニテ、一千八百七十一年（※現在は1872年であるから去年の）ノ統計ニヨルニ、人口スベテ三千八百八十一万七千八百八十八人アリ。其形勢、位置、広狭、及ヒ人口ハ、殆^{ほとん}ト我邦ト相比較ス。故ニ此国ノ人ハ、毎ニ日本ヲ東洋ノ英国ト謂フ。然^{しかれ}トモ、營業力ヲ以テ論スレハ、其懸殊（※懸隔）モ亦甚シ。〉（『米欧回覧実記』第二十一卷〈英吉利国総説〉、2-22p）

面積、人口、島国であることはイギリスとほぼ同じだが、その文明化の実際には大きな差がある。目標ではあるが、それは次元の高い目標であり、当座のモデルとはなりえない。ではフランスはどうか。フランスと日本にも似た面があった。

〈仏朗西人ハ、体格長大ナラス。音声発揚シ（※はきはきして）、資性活潑ニシテ、氣力強健ナリ。英、及ヒ独逸ト返対ノ性質ニテ、其弊ハ剽悍輕躁ニ流レ、忍耐強勉ニ乏シ。毎ニ機敏ヲ以テ勝ヲシム。粗我日本人ノ氣象ニ似タリ。〉（同上、第四十一卷〈仏朗西国総説〉、3-35 p）

国民性、そして産業に工芸的要素が優越していることは、フランスは日本と比較可能だと久米たちは考えた。しかしそれがそのまま近代化のモデルになるわけではない。

ここで〈小国〉の意義がクローズアップされる。ベルギーやオランダといった小国が独立を果たしつつ、なお近代化においても列強とほぼ伍している、その点に注目するのである。この視座は、福沢が『唐人往来』において小国ポルトガルの独立に着目したそれと、ほぼ重なると考えてよい。この列強と小国の対極性もまた、『回覧』の文明把握、近代把握が深化していくひとつの重要な要因である。小国はしかし、重要な参照対象として意識されるものの、国民国家としてのヴォリュームという面で、日本のモデルとなることはできなかった。

そして最後に、プロイセン（ドイツ）が登場する。

〈此（※プロイセンの）土地ヲ比較スレハ、正ニ我日本ト相匹ス（※同等である）。其人口ハ少ナキコト約一千万ナリ（※明治初年度の日本の人口は3480万、プロイセンは2470万前後）〉（同上、第五十五卷〈普魯土国ノ総説〉、2-266 p）

これはもちろん普仏戦争勝利直後のプロイセンであって、やがてドイツ連邦を統括する中核を形成することになる。そのプロイセンが日本と共通する最大のポイントは、いまだ産業革命を貫徹しない農業国であるということだった。

〈普国人民ノ營業ハ、重ニ農牧ニアリ。全国人員ノ半数千二百万人ハ、農ヲ業トスル家ナリ。此国ト英国トノ貿易ニテモ知ルベキカ如ク、農産ノ高ハ、有余ヲ（※余剰を）輸出スルニ足ル。此利益ヲ本トシ、兼テ礦業及ヒ制作ヲ務メテ、外国ニ貿易シ、海外ノ遠地ニモ航通スレトモ、英仏ノ両国、海商ヲ事トシ、製造元品ヲ、常ニ遠地ヨリ輸入シテ（※工業生産品の原料を遠隔地から輸入して）、自国ノ制作ヲ加へ、又外国ニ輸送シ、市儉ノ利ニヨリ（※市場の利潤により）、国ヲ富スノ目的トハ異ナリ、是ヲ以テ其武巧ノ外ハ、甚タ遠国ニ著レザレトモ、其国是ヲ立ルハ、反テ我日本ニ酷タ類スル所アリ。此国ノ政治、風俗ヲ、講究スルハ、英仏ノ事情ヨリ、益ヲウルコト多カルヘシ。〉（同上、第五十六卷〈普魯土西部鉄道ノ記〉、3-298 p）

イギリスは目標とするには高すぎた。フランスとの類似性は外的なもので、近代化それ自体とは関わりが薄い。小国は列強の圧迫を受けながら自主独立を保っているという点では、日本の参照対象として有力だが、しかしやはり近代化そのもののモデルとはなりえない。そこでプロイセンが登場する必然性が生まれる。

プロイセンは領土、人口がほぼ日本と同格の国である。そして重要なことはいまだに農業国でありながら、すでにその軍事力はヨーロッパで認知される存在となっている（まさに普仏戦争の勝利がその証左である）。貿易を見ると、農産物を輸出し、その利潤を鉱工業の発展にあてている。工業製品そのものの輸出で大きな利益をあげる英仏とはあきらかにタイプが異なる。日本も農業国であり、開国当初の主要輸出品は茶と生糸だった。このプロイセンの国富の形成スタイルは、日本にとっても大きなヒントになるかもしれない、木戸たちは考えた。

こうして〈回覧〉全体の真のハイライトをなす、あのビスマルク演説に「感動」する素地が、事実背景そのものから形成されていく。

この演説への傾倒は、近代化のモデル形成という意味で、決定的な意味を持った。その詳細は次節で検討するとして、ここでは、モデル探索の過程そのものが、文明と列強把握の深まりを如実に示していることに注意しておきたい。イギリス、フランス、小国（ベルギー、オランダ）の参照は、まだ局面に限定されており、近代化の全体を構造として把握した上での比較、モデル設定ではなかった。それはあくまで外的な部分的参照にとどまった。それがプロイセンとの比較においては、領土、人口、農業国であることの次に、その余剰農産品を使つての、国富の原資形成にまで注意が向いている。そしてその原資は直ちに軍事面に生かされ、列強に匹敵する地位を獲得していくのである。つまり一言で言って、〈新興国家〉としての構造上の共通点を木戸や大久保たちは、如実にプロイセンにおいて感得したのだった。その近代化の全体的把握、構造分析の正確さにおいて、〈回覧〉の旅路はここにおいて極まるのである。

日本の近代国家草創を全体として概観した場合、やはりこのプロイセンとの近親性の直感を政権最上層部が、これほど早い時期に彼らのコンセンサスとして獲得したことの意味は莫大に大きかったと思う。それはその代表格としての、「ビスマルク心酔」を時として皮肉られた大久保の、帰朝後の生活スタイル、服飾までに及ぶモデル追随のみの次元ではけっしてない。国家そのものの構造的な、類型として、非常に正確に把握され、比較され、そして日本とプロイセンを一つの「後進集団」として位置づけたことに、大きな方向付けの意味があったのである。

こうして見ると、福沢や大隈が、明治十四年の政変でひとまず破れ、プロイセン・モデルが立憲の方向を決めたのも、やはりすでにこの時点での木戸、大久保、岩倉等のコンセンサスに淵源を持つと考えざるをえないと思う。ただそれが木戸、大久保抜きで、岩倉の求心力も弱まる過程で行われたことが、真の問題だったのかもしれない。井上毅を代表とする反動的言説が立憲過程に紛れこんで、結局それが国体論の悪しきニッチを用意したことも、もし木戸、大久保がこの過程を統括していれば、まずありえなかったことではないかと推測されるからである。しかし歴史はそういう欠如態で、この明治初年度のコンセンサスを、ひとつのねじれとして（近代化と反動の混在として）実現していくことになる。

その原点をこうして回顧した場合、そこにおける合理的思考の深さと広さに、あらためてある種の感動を感じるのはわたしだけでないと確信している。

ともあれ、こうしてモデル探索は、見事な成果をあげて終わった。次はこの探索の基軸でもあった、近代国家そのものの青写真、その成熟と構造化の過程を通観してみることにしよう。あらかじめそれが、ペリーやハリスが持ち来たった、文明化イデオロギーとの対峙において行われただろうという直感を得ることができる。したがって、彼らが実地に観察する欧米の文明、開化に焦点を当てれば、その両面の観察が行えるはずである。

(近代本論第十六回テキスト終わり)